

○旗振支部企画 令和3年4月18日(日)  
(市民山の会中止に伴う代替例会)

### 須磨史跡散歩

旗振支部 林 洋治

昔から風光明媚な場所として、また歴史上の多くの人々の足跡が残されている我町須磨。今回は当支部の会員であり、古くから須磨歴史倶楽部の会員として活動されてきた北野さんに詳しくご説明していただいた。参加者25名。



山電須磨駅前に集合、最初に訪れたのは村上帝社。よく前を通るのだが覗いてもみなかった社。村上天皇をお祀りしている。琵琶の名人藤原師長、奥義を窮めようと中国へ渡る途中、ここで一泊。夢に村上天皇の霊が現れ奥義を伝えたため、この地に琵琶を埋めたとの伝説。社と一体になっていた琵琶塚は、山陽電車開通時に分断、なんともはや。



関守稻荷神社(須磨の関跡)天下の三関に次いで重要な関。畿内と西国をつなぐ軍事の要衝であ



ったと言われている。でもこの場所であったかは不明とのこと。誰もが聴いたことのある源兼昌の歌 「淡路島かよふ千鳥の鳴く声に  
いく夜寝覚めぬ須磨の関守」



光源氏のモデルと言われている在原行平が一時左遷されていたとされる現光寺、別名源氏寺。だが紫式部は



須磨に来たことがなく須磨の巻を書いたといわれている。

境内に芭蕉の名句「見渡せば眺むれば見れば須磨の秋」とあるこれが名句とは凡人には思えないのだが？



山電須磨寺駅前に「平重衡捕らわれの松跡」

がある。松の根に繋がれ無念の涙を流す重衡に村人の濁り酒を差し上げたところ非常に喜び。「ささほろや波ここもとを打ちすぎて

須磨でのむこそ濁酒なれ」



### 智慧の道

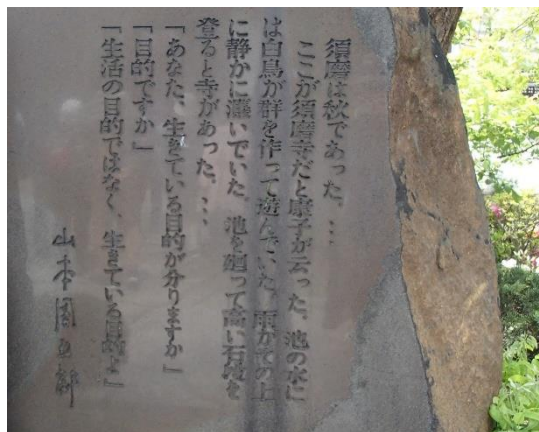
網敷天満宮から須磨寺前商店街を通り須磨寺までの





道。学問の神様菅原道真公と弘法大師、いずれ劣らぬ日本の賢人、双方お参りすると賢くなる。

最後に訪れたのは須磨寺。同寺には敦盛の首塚など多くの史跡と共に子規、芭蕉などの句碑が点在。山本周五郎は、一時須磨に下宿しておりその時書いた「須磨寺付近」が出世作となった。その書き出しが下の碑。



子規句碑  
暁や白帆過ぎ  
行く蚊帳の外



芭蕉句碑  
須磨寺や吹かぬ笛き  
く木下闇

須磨寺と言えばお参りはこの敦盛首塚。僅か16歳で熊谷直実に打ち取られた平家の武将。その時身に携えていた青葉笛と共に日本人の涙を誘う。



神戸の発展と共に、山陽鉄道が明治21年に兵庫～明石間が開通すると神戸・大阪からの利便性が格段に増した。これにより須磨周辺に神戸・大阪の実業家の大邸宅、別荘が覇を競うように建てられるとともに須磨を拠点に活躍された方も多士済々……。

今回、北野さんには密にならないようハンドスピーカー持参で詳しく説明していただいて須磨の歴史を再認識。最後にこの紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。